

2009年  
12月9日  
水曜日

# 夫婦間の交渉力と晩婚化<sup>1</sup>

田畑 顕 准教授（経済成長論）

主婦が家庭で行う家事は家族1人1人の好みにきめ細かく対応するほど喜ばれる。「夫の好みにあわせて献立を考える」、「子供の好みにあわせて服を買う」などである。こうした家事の技能は「家族との関係」においてのみ意味を持つ点に特徴がある。主婦は家族の好みに関する知識を蓄積しているので、「自分の家族」に対してはきめ細かいサービスを提供できる。しかし家族以外に同じような満足をもたらすことは難しい。こうした「特定のひととの関係」においてのみ意味を持つ技能のことを「関係特長的な技能」と呼ぶ。この家事技能の特性こそが、かつて家庭内で女性の交渉力が弱かった理由の1つである。農業を中心とする社会において夫が生み出す生産物や労働は市場で高く評価される。しかし主婦の家事技能は家族との関係において

しか意味を持たないので市場では評価されない。この評価の違いに付け込めば、夫は十分な対価を払わずに妻の家事技能を享受できる。妻の家事技能は家族以外の人間には評価がされないで、妻はどんなに見返りが少なくとも夫との取引に応じざるを得ないからである。これが封建的な社会における女性差別の構造である。しかし経済発展に伴う産業構造の転換は女性に「家事技能の形成に特化する」以外の選択肢を提供した。例えば明治期に発達した製糸業では多くの女性を労働者として採用した。こうした女性労働市場出現は、いざとなれば夫と別れて帰る場所を女性に提供した。そのため夫が妻を家庭にとどめておきたければ、少なくとも労働市場よりは快適な条件を提示しなければならなくなり、家庭内における女性の交渉力を高める効

果をもった。現在女性の賃金は徐々に男性のそれに近づきつつあり、家庭内における女性の交渉力もますます強いものとなってきている。一方、こうした女性の相対賃金の上昇が晩婚化・非婚化を通じ少子化を生み出した側面もある。女性の相対賃金の上昇は結婚・出産・退職によって女性が失うものの価値（機会費用）を高めるので、結婚の魅力が低下するのである。しかし仮に女性が結婚・出産を経験しても就業を継続できるような環境を整えばどうだろうか。女性の相対賃金の上昇はそれでもなお晩婚化・非婚化を生み出すのである。この問いに対する答えの手がかりは、先の夫婦の交渉力に関する議論にある。就業継続が可能な場合、女性の相対賃金の上昇は、家庭内における既婚女性の交渉力を引き上げる効果をもつ。その結

果、結婚した後の女性の家庭における厚生水準（幸福度）は現在よりもさらに高くなる可能性がある。つまり女性が結婚・出産を経験しても就業を継続できるような環境さえ整えば、女性の相対賃金の上昇は、女性にとつての結婚の魅力を増加させる効果を持つのである。しかしそのとき男性にとつての結婚の魅力は…。

1 以下の議論は中林真幸「日本の長い近代化と市場経済」（やさしい経済学 日本経済新聞2009年12月1日）および宇南山卓「結婚促進こそ少子化対策の要」（経済教室 日本経済新聞 2009年11月29日）の議論を参照した。